

第一部

女性の貧困：現状と構造的原因

増えているのに、見えなくなったフランスの貧困女性たち
カトリーヌ・シモン
(ル・モンド記者)

路上生活から見えることーノラの活動と246キッチン
いちむらみさこ
(ホームレス・アーティスト)

フランスの女性の経済的依存と貧困
ソフィ・ボンティウ
(国立統計経済研究所 エコノミスト)

再分配が作り出す貧困大国ニッポン
大沢 真理
(東京大学教授)

増えているのに、見えなくなったフランスの貧困女性たち

カトリーヌ・シモン

「肩には太くて短い根棒、口には短いパイプ、一人の男が村を去っていく。足元には一匹の犬。女たちは作業に気をとられ、彼に関心を向けるものものなどない。1人の女がキビを挽いている。そばで別の女が畑を耕す。3人目の女は束ねた瓢箪を頭にのせて運ぶ。最後の4人目の女は、綿を紡ぐ。この情景は大きな四角の布にプリントされたものだ。ハワは、それを時折眺める。彼女は、この布をモントルイユにあるアパートマンのサロンの壁、巡礼地メッカのいくつかの写真の隣にかけている。西アフリカの村のある風景。チャター便が飛ぶ以前の一つの村、フランスがまだ外国の労働力を必要としていた頃のことだ。パイプを加えて歩く男以外、男たちの姿は見えない。」こうした、書き出しで始まるルポタージュが、ル・モンド紙に載ったのは、11年前のことだ。ルポタージュのタイトルは、「サン・パピエたち（滞在許可証をもたない人びと）の见えない闇」。このルポタージュは、滞在許可証がないまま入国したアフリカ女性たちの来歴を語っている。すなわち、合法的に、たいていは観光ビザで入国し、不法にフランスに滞在し、新しい生活—マリ、セネガルあるいはギアナに残してきた生活よりずっとよい生活—を築こうとする女たちの。

この記事が1997年2月に掲載されて以来、多くのことが変化した。アフリカの村には男たちはいなくなり、女たちが

働いた。パリ東北の郊外、モントルイユのサロンの壁にかけられた四角の布に描かれたアフリカの村。この村はいまでもまだなお存在する。たしかに。いくつかの違いを除けば。まず、アフリカの女たちの多くもまたいなくなった一男たちのように。今日では、世界で移民の二人に一人は女である。彼女たちは、一人で移住して来る。自立して、家族を再結集しようと計画することもなく。こうした女性移民の割合は増加している。もう一つの重大な違いは、あれ以来多くのアフリカ人は、正式のビザの取得が不可能になったことだ。家を去り、ヨーロッパに辿り着くことができるためのビザが。だから、彼らは出発する…ビザももたず、どんどん危険になるルートを辿って。その結果、何千という出稼ぎ労働者の死体が地中海の奥まった場所、ジブラルタル海峡とシチリアの水域で眠っている。彼らが乗ってきた破船してしまった小船の中で息絶えて。また、他の数千人は、無事に到着する前に、サハラ砂漠で乾きと飢えと疲れで死んでしまう。1990年に始まったヨーロッパ国境の閉鎖は、今日ではよく知られていることだ。だが逆に、安価な労働力の需要は変わっていない—とくに、農業、林業、サービス部門での。しかも他と同じように、アフリカでも、経済的、政治的、安全上の理由から、人々が国を去りたいと望んだり、その必要に迫られたりする状況もまたなくなっては

いない。

1997年に私が出会ったサン・パピエとこの冬にインタビューしたサン・パピエたちを比べると、状況は確実に悪くなっている。加えて、現在の経済危機で、まさに危機の始まりでしかないが、一層状況悪化の恐れが生まれている。昨年11月の終わりにⁱ、私が話を聞いた女たち、彼女たちは、フランス語でSDF（不定住者）と呼ばれる人々、すなわち定まった住居のない人々だった。仕事もなくあるいは家賃を払う十分な収入もない女たち。彼女たちの中にアフリカ女性たちはいる。アフリカ女性たちだけではないが。今年1月に出た国立人口問題研究所（INED）の調査によればⁱⁱ、アフリカの南サハラからフランスに来る移民の割合は、10年で確実に増加している。1994年から2004年の間に、入国登録者数は、10%から17%に上っている。しかも、調査者たちの言葉を引用すると、「移民は、ヨーロッパの他の地域やマグレブから来る流れにより、さらに大きく増加している。」また、アフリカからの移民について非常に歪められたイメージがもたれているので、次のことは知っておかねばならない。大多数のアフリカからの移民はアフリカにとどまったままであるという事実が重要なのだということを。

私が、かつてのあるいは今の滞在許可証のないアフリカ女性について語るとき、それは、彼女たちの数が特別多いからだけではない。彼女たちが問題を起こしているからでもない。彼女たちは数の上ではむしろヨーロッパ女性やマグレブ女性たちより少ない。彼女たちは他の地域からの移民よりより多くの問題をもたらし

ているわけでもない。私がアフリカ女性について語るのは、フランスの土地で、貧困状態にある、あるいは不安定な状態にある女たちの中で、彼女たちが最も極貧であり、最も傷ついているからである。

社会福祉緊急医療救助サービス監視委員会の最近の推計によれば、緊急宿泊センターに収容された女たちの中で、半数以上が外国人で、フランス人は半数以下の状況にあった。入国許可証のない女たちについては、収容された外国人の約15%である。女で、しかも外国人であることから、ジャーナリストのヴェロニック・ムージャンが呼ぶところの「二重の苦痛」を受けるのは彼女たちである。彼女は、5年前に書いた『過酷な状況に置かれた女たち』ⁱⁱⁱというタイトルの本の中で、その頃、彼女は収容施設でボランティアとして働いていたのだが、その中で、たちまちに路上生活者になってしまった不安定雇用の女性、失業女性、暴力を受けた女性たちの非常に厳しい生活を描写し、「私たちは、彼女たちを見ることなく、彼女たちとすれ違う。なぜなら、多くの人々は、彼女たちの困難な状況に罪悪感を感じ、気づかぬふりをするからだ」と書いている。今日、フランスでは、公式の貧困ラインは月880ユーロとされる。これは、最低賃金（SMIC）満額の85%である。「女たちは、たいていは子どもを抱えて、このラインに最も近いからである。彼女たちは男たちよりずっと多くがパート・タイム雇用に就くからであり、カップルが別れたとき、子どもを引き取るのは、彼女たちであるからだ。」私が上記に引用したのは、日刊紙パリジャンに載った、経済学者ドゥニス・クレー

ルへのインタビューである。このインタビューは、彼の著作『貧困労働者のフランス』^{iv}が出版された際の9月に行われた。

11年前にル・モンド紙に載った最初に引用したルポルタージュ以来、多くのことが変わった。現在のフランスが経験している状況は、貧困はもはや「あの不可触賤民」の占有物ではないということ。あえて言えば、現代の不可触賤民は、社会階層の「下の下」にいる非正規の移民たち、失業者たち、女たちなのである。今日、中間階級もまた不安定な状況にさらされている。新聞雑誌、とくにル・モンド紙や週刊誌のル・モンド2は、キャンピング・トレーラーやモービル・トレーラーに住まざるを得ない貧困状態にあるサラリーマンについてのいくつかのルポルタージュを載せている。また、少しひどい表現だと思うが、一人親家庭——人の親だけで作る家庭を指す、ほとんどは母親と子どもから成る、いいかえれば、男のいない家庭——これら一人親家庭は、括弧の付きの「普通の」家庭よりはるかに不安定におびやかされている。加えて、次のことを指摘しておくのは興味深い。国立統計経済研究所（INSEE）の一人親家庭についての最初の調査が、約1年前、正確には2008年6月に公表された。そこで明らかになったのは、2005年、フランスでは、一人家庭の母親を見ると、二人に一人しかフルタイムで働いていないことだ。

おそらくさらに驚くべきかつ心配なことは、一戸建ての住宅地域の中に、つまりホワイト・カラーや中間管理職の住む地域にも貧困と不安定が及びつつあるの

が見られることだ。ル・モンドに載ったミシェル・デルベルグのルポルタージュが明らかにしたのは、パリ地域の南部、エソンヌ県サヴィニ＝シュール＝オルジュで、社会福祉食料品店を頻繁に訪れる「新しい貧困層」の数がどんどん増えていることである。2008年、店を訪れる頻度は、2007年と同じく20%増だ。「どんどん増える」と言うとき、「女性が増えている」と私は言うべきだろう。なぜなら、ここでもまた、一人で子どもを抱えた女たちが最も危険にさらされているからだ。たいてい、貧困は離婚か夫の失業とともにやって来る。実際、多くの場合、女たち、ホワイト・カラーや管理職の妻たち自身は、「全く働いたことがない」のである。サヴィニ＝シュール＝オルジュの社会福祉食料品店の店長はそうにル・モンド紙のレポーターに説明している。現在の経済危機と、それに伴う大量解雇の波によって、こうした深刻な状況はますます拡大の方向に向かっている。

最後に、なにが大きく変わったのか。この点を取り上げて終わりにしたい。それは、こうした傷ついた人々に向けられるまなざし、より全般的には、危機へのまなざしである。危機が爆発する前でさえ、さまざまな調査は行われていた。それらの調査は、「担保のない人々」、つまり「なににもたない」人々——住居がない、滞在許可証がない、仕事がない人々——に対する、うんざり、さらには無関心を示していた。その上、新聞・雑誌記事も、こうした冷淡さ、連帯の拒否、軽視への傾向を示している。人々が読むのは、分析ばかり、数字と統計にあふれたテキストであり、ルポルタージュはごくわずか

である。人々の苦しみや不幸な生活は、ジャーナリストの記事に私たちの隠語でいうところの「色」をつけるのに役立つのだ。この「色」で膨らませ、誇張するのである。人々の苦しみは、時折、時折でも「闘う一兵卒」の大義となる。しかし、貧困にある人々自身、その肉体、夢、人生の軌跡、そうしたすべてはまったく記事にはあらわれない。あるのは、現実遊離（霊肉分離）への傾向、非人間化への傾向として取り上げる戦略だけだ。あたかもこれらの人々が正確には人間ではなかったかのように、しかも問題、不快な抽象化、最悪の場合、わずかの哀れみ、または徳のある論説委員にしかふさわしくない「疫病神」であるかのように。

私が作った一覧表は暗い。おそらくあまりにも暗い。それは、私がジャーナリストであることから来ている。ご存知のように、それはフランスでも日本でも事実だからだが、ジャーナリストは脱線した列車にしか関心をもたない。定刻に到着する列車には興味がないのだ……。しかしながら、フランスに関して、国家による貧困者たちへの援助に言及しないのは、不公平である。とくに、財政支援、住宅支援、保健衛生へのアクセス支援などがある。これらの支援は無視できない。しかし、次のことを指摘しておかなければならない。こうしたさまざまな支援は、貧困者の中でも最も貧困な女たち、たとえば、サン・パピエと呼ばれる女たちには届かない。ほとんどの場合、国の援助を要求して、それを受けることなど彼女たちには想像もつかないからである。

さらに、つぎのことを言うておかないのは不公平だろう。一群の 1901 年法に

基づく民間団体や基金基盤型の団体などである。これらの団体は、貧困者や不安定雇用者などに生命維持のための支援を提供している。とくに、思い浮かぶのはキリスト教や左翼の人道主義的団体一避難民に対する活動団体間連携委員会「シマド」（la Cimade : Comité Inter Mouvements Auprès Des Évacués）、「エマウス」（Emmanüs : 1949 年ピエール神父により創設されたホームレスなど貧窮者の救済・支援団体）、「スクール・ポピュレール」（le Secours populaire : 1945 年創設の貧民救済団体）一などだ。1993 年にグザビエ・エマニュエリ医師により創設された緊急医療支援サービス団体「サミュ・ソシアル」（le Samu social : Service d'aide médicale urgente）も忘れてはならない。この組織は、民間メセナから資金を受け、いまや、無一文になってしまった人々の救援を行う主要団体の一つとなっていて、食料品、毛布、治療薬などを配っている。その独自性は、彼らが機動班を伴い、小型トラックで巡回しながら、貧困者のところに出向いて行くことにあり、その逆ではない。

貧困者や不安定雇用者の問題について、新聞の取り扱い方に立ち戻ると、おそらく、扱い方が変れば、事態は変化するだろう。そう願わなければならない。ヨーロッパでは、映画一私が思うには、アニエス・ヴァルダのフィルム「屋根も法もなく」、ブヌワット・デルフィーヌとギュスターブ・ケルヴェールのフィルム「ルイズ・ミシエル」、それからケン・ロアックやダルデンヌ兄弟のフィルムも忘れてはならないだろう—映画は、新聞文字やテレビ映像よりもこうした社会の

現実に、臆病にならずに、より毅然と、
勇気をふるって立ち向かっているように
思われる。フランスでも日本でも、メデ
ィアやジャーナリストたち、世論の作り
手は、貧困者たち、とくに女性の貧困者
たちを闇のなかに放置することは決して
しないと断言しよう。

(訳：中嶋公子)

ⁱ カトリーヌ・シモン「“宿泊者たち”と
過ごした一夜」、2008年12月2日付ル・
モンド紙

ⁱⁱ 定期刊行物『人口と社会』N°452, 2009
年1月

ⁱⁱⁱ ヴェロニック・ムージャン『過酷な状
況に置かれた女たち—1ヶ月600ユーロ
以下で暮らす女たちの調査』、ピエール神
父の序文付き、La Martinière 社、パリ、
2005年

^{iv} ドゥニス・クレール『貧困労働者のフ
ランス』 Grasset 社、パリ、2008年9
月、2008年9月23日付パリジャン紙で
のインタビュー

^v 2008年12月4日付ル・モンド紙